

『心中天の網島』における義理

——小はるを中心に——

谷口博子

一、はじめに

二、「女同士の義理」について

1、女同士の義理について

2、二通の手紙と女同士の義理

3、おさんの告白と女同士の義理

4、「其一ふでのおくふかく」と小はる

三、『心中天の網島』における義理

四、おわりに

近松門左衛門作『心中天の網島』は、紙屋治兵衛と遊女小はるの心中の物語であり、その芝居が見せるテーマは、治兵衛の女房おさんと小はるの「女同士の義理」にあると捉えられ、すでに固定化されたかのような感さもある。はたしてそうだろうか。稿者は、通説の「女同士の義理」は成立していないと考える。その鍵は、二人の女たちの間を往き来した「ふみ」である。本稿では、返事を出した小はるに注目しながら、まず手紙を鍵に「女同士の義理」について考え「女同士の義理」が成立していないことを述べ、次に手紙にこめられた二人の女たちの深い思いを見る。さらに小はるに注目することによって小はるの愛した相手、治兵衛の姿を明瞭に浮かび上がらせる。『心中天の網島』全体を貫くのは小はるの義理であり、最後に治兵衛は義理を通す。遅い治兵衛の義理ではあるが、男として〈心の誠〉を通したのである。

一、はじめに

享保五年（一七二〇）十二月六日大坂竹本座初演、近松門左衛門作『心中天の網島』は、紙屋治兵衛と遊女小はるの心中の物語であり、その芝居が見せるテーマは、治兵衛の女房おさんと小はるの「女同士の義理」にあるという。

これまで多くの先学がそう捉え、多くの論文がこの線上で論じられ書かれてきた。いわばすでに固定化されたかのような感さもある。「同士」という言葉は、例えば『日本国語大辞典』によると、その二項目に「②動作・性質・状態において、互いに共通点を持つている人。名詞に直接ついで、接尾語的に用いる。たがい・・・・である者。同じ仲間。どち。」とある。つまり「女同士の義理」が成立するには、おさんと小はるがどのような「動作・性質・状態において」たがいに共通点を持ち、認めあっているかが明確にされなくてはならない。互いを受け入れて初めて成り立つのである。ところで二人は、本当に「女同士の義理」で結ばれていたのであろうか。「女同士の義理」という言葉は、本作中おさんが一回使ったのみである。一方の小はるは、一度も口にはしていない。稿者は、「女同士の義理」は成立していないと考えている。それは、近松の意図に従って小はるという一人の女性の生き方を見つめてゆくと、

小はるはおさんに影響されていないからである。小はるは自立した女性なのである。

ところで本劇は、小はると治兵衛の心中寸前のところから始まっている。上之巻は、小はるがその心中を回避しようとする場であるが、それは小はると治兵衛の別れの場となる。この場のポイントは、最後にほんのちよつとだけ姿を見せてその存在を示す「一通の女ふみ」である。おさんから小はる宛の「内密」の手紙であり、治兵衛の兄の孫右衛門により火に入れられる運命の手紙である。そのふみについて近松は次のようにいう。

ぶしんぢうか心中か。誠のこゝろは女ばうの其一ふでのおくふかく。たがふみも見ぬこひのみちわかれて。

こそはかへりけれ。（上之巻）

近松は、ここに本作を読み解く鍵を示し問題提起をしている。「不心中か心中か」は小はるのことであり、近松は、小はるに注目するよう示唆しているのである。ところでそのふみは劇が始まる前におさんから小はるに出され、小はるもすでに返事を出している。劇はその二人の手紙の交換を既成の事実として始まっている。

本稿では、返事を出した小はるに注目しながら「女同士の義理」は成立していないことを述べ、本作に描かれた「義理」を見てゆく。

二、「女同士の義理」について

1、女同士の義理について

本作における「女同士の義理」は、二人の女たちの手紙の交換にはじまる。その手紙で一旦は平和になったと見えた紙屋内であるが、小はるが死ぬ覚悟をしているのに気づいたおさんが小はるに義理立てして、夫婦して小はるを助けようと算段し、それがおさんの実父五左衛門の知るところとなり失敗、おさんは実家に連れ戻されてしまう。一方小はるは心中の場で、そのおさんに義理立てして所々の死をしようとする。このような構図に描かれたと見る「女同士の義理」を先学は、「女二人の美しい人間関係^③」が描かれたと高く評価される。例えば廣末保氏は、女同士の義理は「制度的な秩序差別を越える^④」、おさんは小はると「対等の女同士として対している^⑤。」と論じ、大橋正叔氏は「小春とおさんの相手への誠意^⑥」などと論じられる。以上は、義理を「女同士の義理」という一つの義理として括った見方であるが、これに対し川村佳代子氏は、「女同士の義理」は、おさんと小はるの治兵衛を愛するという情からでた共通理解により成立した^⑦とされ、その義理は「小春にとっては治兵衛と縁を切るにより治兵衛の命を救うことであり、おさんの義理は小春の命を救うことにあつ

た。」と、女同士の義理には「小はるの義理とおさんの義理との二つの義理が存在^⑧」し、その二つは「時間差のある一対の義理なのである。」と論じられる。また「義理」という語に注目してみると、白方勝氏は、本作に八回使われた「うち七例までがこの女同志の義理について用いられているところからも、作者の意図がここにあることがわかるであろう^⑨。」と作者の意図を読み取られている。

さてこのように論じられる女同士の義理であるが、鍵はおさんから小はるへの「一通のふみ」である。当時の社会では、れっきとした商家の女房が遊女に手紙を送るなど、絶対により得ないことである。それは、例えば次のような書物からもわかる。

西川如見著『町人囊』巻四に次のようにある。^⑩

遊女町などをまなきこそよかるべき事なれ共、数万人都会の地には、旅人も多く集る故、其中には必ず壮年（左訓「としわかき」）にして淫乱成者も有て、人の妻をそゝのかし、人の娘をそこなひ、或は心に叶はぬ事あれば、悪事切害其外種々の災などに及ぶ事、聖人の御世ならばしらず、末代にはなくて叶はぬ事なるゆへ、此悪事に至らしめざらんが為に、遊女町をば公儀よりゆるし置給ふ事となり、此故に繁栄の地には遊女有事也。元来不作法なる人のため、止事を得ずしてたて置

る、遊女町なるゆへ、是を渡世とするものをも万人い
やしむ故、四民の内に交る事あたはず。

すなわち遊女町など本来はない方が良いが、人間の性に
て仕方なく必要として置かれた。いやしい職業であり、四
民とは交わることはできないというのである。つまり義理
という関係そのものが有得ない世界同士なのである。それ
なのにおさんは、小はるに手紙を出した。その理由は後で
述べるが、特に注目すべきは小はるが返事を出したことだ
である。ところでおさんは、小はるから返事がくると考えて
いただろうか。重友毅氏は、おさんが手紙を送ったことに
ついて「しかも彼女がそれをあえてしたのは、緊急の場合、
他に手段がないと判断したからにほかならぬが、幸いにも
それは先方の受け入れるところとなった。」とその緊急性
とともに不確実性に言及されるが、稿者は確信していたと
考える。夫の命をかけた手紙なのである。必ず返事がくる
という確信がなければ書けない手紙である。近松は「女房
の其一ふでの奥ふかく。」と、手紙の奥におさんの深い思
いを書く。さらにその往復は、最短の時間で行われたと考
えられる。悠長な手紙の交換でないのは明らかである。

2、二通の手紙と女同士の義理

まずこの二通の手紙の内容を見てみよう。それは、本来

当人たち以外の誰にも知られるはずのないものであった。
しかし当のおさんが、小はるの死の覚悟に気付き動転し、
治兵衛に直接告白したことで明らかになる。次はそのおさ
んの言葉である。

女はあいみがびごと。きられぬ所を思ひ切夫の命を
頼むく。と。かきくどいだふみをかんじ。身にも命に
もかへぬ大じのとのなれど。ひかれぬ義理合おもひ切
との返事。わしや是まもりに身をはなさぬ。(中之巻)
先学は、おさんの「女は相身たがびごと」という言葉に
注目し、例えば白方勝氏は、「小春を遊女という枠から一
歩踏み出させることのできるもの」が、この「女は相身互
という詞」であり、「女は相身互と言う時、人妻も遊女も
平等の立場に立つ。」と述べ、「女同士の義理」の成立基盤
にこの言葉があるとされる。廣末保氏は、おさんの「自分
自身の運命打開のため」の言葉であり、おさんは「切ら
れぬ所を思ひ切夫の命を頼む」と叫ばざるをえない。」の
であり、「このおさんの必死の行為が、『身にも命にも代へ
ぬ大事の殿なれど。引かれぬ義理合思ひ切る』という状態
へ、小春を追い込む。」などと論じられる。

このように論じられるのは、実際手紙が往復関係にあり、
おさん自身が、小はるは自分のふみに「感じ」て返事をく
れたと言っていることによるのであろう。果たしてその表

面どおりに見てよいのだろうか。小はるは実際どうだったのか。その問いに答えるためには、二つの手紙を丁寧に比較し検討する必要があると考える。そこで次にそれを試みる。

手紙の冒頭、おさんは「女は相身たがびごと」と呼びかけたのに対し、小はるは「身にも命にもかへぬ」と返した。つまりおさんが互いのこととして申し出たのに対し、小はるは治兵衛のことを返している。小はるは、同感、同調してはいないのである。すなわち二人の手紙は、明らかにその書き出しから明確な違いがあるのがわかる。ではそれ以外の部分はどうであろうか。その対応を確認すると次のようになる。

「きられぬ所を」は「ひかれぬ義理合」と対応し、「思ひ切」は「おもひ切」と対応、「夫の命」は「大じの殿」に当たる。残る語は、「頼むく」と「なれど」であるが、これは対応関係にはない。

まず「夫の命」と「大じの殿」について考える。注目すべきは「夫」という語である。「夫」は「妻」に対する語であり、おさんは治兵衛とは「夫婦」という状態だと明言しているのである。もしおさんが例えば、前述の廣末保氏や白方勝氏らの論じるように小はると対等の立場、平等の立場に立つのであれば、それは小はると「女」という性質

において同じということであり、それならば「夫」ではなく、小春と同様に「殿」あるいは「治兵衛」でなければならぬ。即ちおさんは、自ら「夫」と言う限りにおいて、まず自分自身が夫婦という枠組みを出ていないのであり、「女は相身たがびごと」という言葉とは裏腹に、「女同士」の立場には立っていないのである。

次に小はるが返した「ひかれぬ義理合」という言葉を考える。これをどう解釈するかで小はるの手紙の意味が大きく変わる。その明確な解釈を搜すと、例えば山根為雄氏は「義理合ひ」について「女同士の助け合う道理」「思ひ」と「思ひ切る」をかける。¹⁴と注釈され、「引くに引かれぬ義理合いを思い、思い切る」と口語訳をされ、祐田善雄氏も、「引くに引かれぬあなたへの義理を思つて治兵衛さんのことは断念します。『義理合思ひ』と『思ひ切る』を掛ける。義理合は義理にからむこと。義理のつきあい。」と語釈された。「あなた」とはおさんのことである。先学の解釈はこのようになされてきたといえよう。つまりこの「義理合」は、小はるのおさんに対する義理であるという解釈である。

ではここで再度この二つの文章を考えてみよう。「きられぬ所を」は「治兵衛との縁」のことである。そうするとそれに対応する「ひかれぬ義理合」は、同様に「治兵衛と

の義理合」と考えることができる。つまり小はるは、自分の言葉「身にも命にもかへぬ大じの殿」を受けて後に続けたのである。稿者は、小はるの返事を次のように口語訳する。

私にとつて身にも命にもかへぬ大事な殿ではあるが、この治兵衛との引くに引かれぬ義理合いを思い切ります。

つまりこの文章は、小はるの治兵衛への愛と義理をストリートに表明しただけの文章なのであり、おさんに頼まれたからその義理によつて身を引くという内容の文面ではないのである。また頼まれて了承するというような言葉もない。すなわち小はるは、おさんに「かきくどかれた」わけではなく、当然おさんに「追い込まれた」わけでもない。小はるは主體的に手紙を書いたのである。

ではこのおさんの手紙はいったいどんな役割を果たしたのか。

その前に、小はると治兵衛の心中はどのような状況で決意されたかを確認しておく。小はるはその時の様子を、次のように侍客にうち明けている。小はるは、深い馴染みの紙治とは逢瀬を止められており、自分はいつ引かされるかもしれない、そうなれば「ぬしは猶一ふんたゝず。いつそ死んでくれぬか。ア、しにましよとひくにひかれぬ義理づめ

にふつといひかはし。」たという。つまり、互いに一分・立・たい、立・て・さ・せ・たいという一心ゆえに「ふと」心中を約束したのである。当然それは女二人の手紙より以前のことである。ところで小はるは、治兵衛と小はるを争う太兵衛をして、「心中よしいきかたよし床よしの小はる殿。」といわせ、この侍客も「お名聞て恋したふたお女郎。」という。つまり遊女として名に聞こえる評判の女性なのである。

先の『町人囊』は続けて次のように述べる。

古の遊女白拍子などゝいふ類は、歌を説又は仏道のことはりなどをしり、小歌などにも人の教訓となれる事をかなで、今の遊女歌舞伎の類にはあらず。やさしき事のみ多かりしと見えたり。小歌なども古の小歌、りうたつなどの類は、其唱雅いづれも人の心を和らげ、世俗の教訓とも成べき事多し。童幼のはやり歌も、古のは物によそへて代を風したる事など有て、上つかたの人に心を付る類もありし。(巻四)

すなわち遊女は本来、人の心を和らげるものだといふのである。小はるは、大坂南の風呂屋からこの北の新地(曾根崎新地)に来た下賤の女郎である。古の白拍子などと単純に比較はできないが、例えば藤本箕山は、『色道大鏡』巻第十四雑女部第十三風呂女篇(風呂女)において、

何事もむかしにかはり、世中をとるふるといへども、

都はさすがなれば、寛文のはじめに、風呂の四天王あり。所謂亀屋の佐津・丁子の吉・丁子の百合・清水の小七是なり。其中に佐津こそ、殊にすぐれにたれ。容兒きよらにして、粧ひ古今に獨歩せり。

と書いている。いわば小はるも佐津たちと同様に、古今の遊女に劣らないすぐれた遊女なのである。人の心を和らげ、男を愛することは身命に代えて貰くが、決して愛する男の生活を破壊したり、あまつさへその死を望みはしない。小はるは、確かに「ふと」言い交わしたのである。小はるはその直後から、自分の軽率を苦しんだのではないだろうか。それは自分の死ではなく、愛する男を死なせてしまうことへの後悔である。そこへおさんから手紙が来た。小はるにとって信じられない事であったが、まさにその時であった。

手紙の役割はここにある。おさんの手紙は、明らかに治兵衛の「安全な居場所」を示していた。だから小はるは、迷うことなく「思ひ切」と返事を出したのである。それは、ただ「治兵衛を死なせないためであり、おさんの手紙に「感じ」ての手紙ではなく、ましておさんへの義理ではない。そもそも義理の関係にはない。手紙は、小はるが自分の心にけじめをつけ、その決意を実行する契機となったのである。そう考えると小はるの文面は、すっきりと納得がゆく。この文面には、〈治兵衛の命を必ず助ける〉ことと

〈小はる自身の死〉の決意が書かれているのである。

小はるは、治兵衛との義理を「おもひ切」と同時に、自らの命をも「おもひ切」ったのである。治兵衛の兄の孫右衛門におさんの手紙を見つけられ、しかしすべてを察した孫右衛門の「起請共に火に入ル。」との誓文に、小はるは「ア、忝い。それでわたくしが立ます」と心から安堵し、孫右衛門の義理に感謝するのである。

ところで二つの手紙に共通する内容は、おさんの「夫の命を頼む」と小はるの「身にも命にもかへぬ大じの殿」である。二つの手紙は同じ目的のもとに書かれたのであり、それは治兵衛を死なせないことであった。それ故に手紙は往き来したのである。

3、おさんの告白と女同士の義理

女同士の義理が成立していないと考えるもう一つの根拠は、おさんが治兵衛に小はるとの手紙のやりとりを告白したことである。そもそも二人の手紙は、治兵衛には絶対に「秘密」であるという合意のもとにある。それをどのような理由があるにせよ、おさんは自ら破った。明らかにここで「同士」という関係は破綻している。次に、おさんが小はるの手紙の真意を全く理解していなかったことである。おさんが小はるの真意に気付くのは、治兵衛から聞かされ

た小はるの「太兵衛には請出されぬもしかねぜき〔銀堰〕で親かたからやるならば。物の見ことに死んで見しよ。」という言葉による。おさんは「はつと」気が付くのである。

ヤアウハウそれなればいとしや小はるはしにやるぞや。ハテサテなんぼりはつでもさすが町の女房じやの。あのお心中者なんのしなふ。きうをすくくすりのんでいのちのやうじやうするはいの。いやそうでないわしが一生いふまいとは思へ共。かくしつゝんでむざ／＼ころす其つみもおそろしく。大じのことを打あける。小はる殿に不心中けし程もなけれ共。ふたりの手をきらせしは此さんがからくり。こな様ンがうか／＼としぬるけしきも見へしゆへ。あまりかなしき女はあいみがびごと。きられぬ所を思ひ切夫の命を頼む／＼と。かきくどいだふみをかんじ。身にも命にもかへぬ大じのとなれど。ひかれぬ義理合思ひ切との返事。わしや是まもりに身をはなさぬ。是程のけんぢよがこなさんとのけいやくちがへ。おめ／＼太兵衛にそふ物か。おなごは我人一むきに思ひかへしのない物。しにやるはいの／＼。ア、ア、ひよんなことサアサアさうぞたすけて／＼と。さはげば夫もはいもうし。取返したきしやうの中しらぬ女のみ一通。兄きの手へわたりしはおぬしからいたふみな。それなれば此小はるしぬる

ぞ。ア、悲しや此人をころしては。女どしの義理たゝぬまづこなさんはやういて。どうぞころしてくださるな（中之巻）

ここで話題になつてゐるのは小はるであり、傍線部からわかるように小はるの命が問題にされてゐるのである。ところで女二人の共通の目的は、治兵衛の命を守ることであつた。それがここでは、小はるの命になつてゐる。目的が変わつてしまつてゐるのである。

次におさんがとつた行動は、小はるの身請けの手付金の工面である。おさんはたんすを開き、自分や子供の衣類も「手も綿もないそでなし」になるまで残さず出し、さらには商売の仕切り金まで取り出し「夫の恥と我ぎりをひとつに」風呂敷につゝみながら、「わたしや子共は何きいでも男はせけんが大じ。請出して小はるもたすけ。太兵衛とやらに一ふんたてゝ見せてくださんせ」と言うが、治兵衛に「手付渡してとりとめ請出して其後。かこふて置か内へ入るゝにしてから。そなたは何と成ことぞ」と言われると、「アッアそうじや。ハテナんとせう子共のうばか。まゝたきか。ゐんきよ成共しませう」とわつと泣き叫ぶのである。小はるの死に思い当たつた夫婦の混乱ぶりがよくわかる。治兵衛もおさんと同様、小はるのことはわかつていなかったのである。その上おさんが手紙のことを治兵衛に打ち明

けたのは、「かくしつゝんでむぎ／＼ころす其つみもおそろしく。」と自分の罪を恐れたのである。注目すべきは、ここでは小はるの義理は全く無視されているということである。おさんと治兵衛の自分たちの義理だけがあるのである。¹⁷⁾

小はるの義理は、へ治兵衛の命を助ける／＼こととへ小はる自身の死／＼であつた。「女同士の義理」が成立するには、この小はるの義理を立てねばならない。それができないおさんに小はるとの間で「女同士の義理」が成立しないのは明らかである。川村佳代子氏の言われる「一対の義理」も、それが二人の共通認識でない以上「同士の義理」にはなり得ないのである。おさんのいう「女どし」とは、単に二人が女性であることを意味するにすぎないのである。

ところでこの場で次の言葉に注目してほしい。

わたしや子共は何きいでも男はせけんが大じ。請出して小はるもたすけ。太兵衛とやらに一ぶんたてゝ見せてくださいんせ（中之巻）

いわばこの緊急の時におさんの心底にあるのは、夫治兵衛の「世間体」であり「面目」であつたのである。このことは裏を返せば、おさんは常に紙屋の女房さんなのであり手紙を出した時のさんもそうであつた。つまりおさんを突

き動かしているのは、商家の女房としての矜持なのである。おさんはずっとこのように生きてきたのであつて、例えば白方勝氏が「彼女は無意識のうちにもみずから妻の座を出」と述べ、廣末保氏が「この時、おさんは妻の座から「茶屋者」としての小春に対しているのではない。」と述べ、川村佳代子氏が「おさんは（中略）自分が治兵衛の女房という立場を忘れていると言える。」などと述べられるのは、当たらないといえよう。¹⁸⁾そしてここに、おさんが小はるに手紙を出した理由が推察されるのである。おさんは治兵衛に一人の女として裸でぶつかることができず、唯一の方法は、治兵衛の相手の小はるに談判するしかなかったのである。

さらにおさんにはへ心の闇／＼があつた。ずっと心の奥底に押し殺してきたものの、この直前おさん自身が明かしてしまつてゐる。それは、治兵衛が小はるに縁切りの誓紙を書いてなお涙を流しているのに気づいた時、おさんは思わず口にしてしまつたのである。

あんまりしや治兵衛殿。それ程なこりおしくばせいしかゝぬがよいわいの。おとゝしの十月中のゐの子にこたつ明た祝義とて。まあ是こゝで枕ならべて此かた。女房のふところには鬼がすむかじやがすむか。二年といふ物すもりにしてやう／＼はゝさまおぢ様のおかげ

で。むつまじいめをとらしいね物かたりもせう物と。

たのしむ間もなくほんにむごいつれないさ程心残らば
なかしやんせく。其涙がしづみがはへながれて小は
るのくんでのみやらふぞ。エ、きよくもないうらめし
や（中之巻）

つまりおさんは長いこと夫に捨て置かれ、夫の愛に飢え
心の奥には嫉妬もあつた。^①しかしそれは絶対に治兵衛には
知られたくなかつたのである。ではそれ程の妻の矜持とは
一体どのようなものであろう。例えば、藤本箕山は先の
『色道大鏡』巻第十四雑女部第一妻女篇において、

妻といふは、人の家室也。男女は人倫の本にして、子
孫を相續ぐ。且、五典の其ひとつなれば、此部の巻頭
にをく。夫人倫の始まる所は夫婦なれば、なくてはかな
はぬ道なれども、淫する時は人倫をみだる。最女の中
にこのましからぬものは、人の妻なるべし。夫の氣に
はいらざれども、むさと離別もしがたきもの也。

と妻と他の女性との違いを明記している。おさんには「子
孫を相續ぐ」という「妻」なればこそ成し得ることがあり、
さらに紙屋の女房として家（イエ）を守るといふ勤めがあ
つたのである。立て簞笥の小引出から投げ出した一包みに
「ヤかねか。しかも新銀四百め。こりやどうして」と「め
さむる計」に驚く治兵衛に対して、おさんは「そのかねの

出所も跡でかたればしれること。此十七日いわくへの紙の
しきり銀にさいかくはしたれ共。それは兄ごとだんかうし
てしやうはいのおは見せぬ。」ときっぱり言い切る。おさ
んは、決して商売のことを忘れてはいないのである。

4、「其一ふでのおくふかく」と小はる

おさんの手紙は確かに治兵衛の安全な居場所を示してい
た。二人の女たちの願ひ通り、治兵衛は家に帰つた。とこ
ろでおさんの手紙はただそれだけであつたらうか。小はる
の願ひもそれだけであつたらうか。近松は「誠のこゝろは
女ばうの其一ふでのおくふかく。たがふみも見ぬこひのみ
ちわかれて。こそはかへりけれ。」と書いている。近松は
手紙の奥に、そして恋のわかれの奥に、女たちの深い思い
があることを書いているのである。その思いを見なければ
ならない。

では再度おさんの手紙を考えてみよう。おさんは常に紙
屋の女房さんであり、その枠組みの中に生きている。その
おさんが通常ではあり得ないことをした。「夫の命を頼む
く」という文面の手紙を、しかも「交る事あたはず」と
される世界にいる遊女小はるに宛てて出したのである。稿
者はここにおさんの〈覚悟〉をみる。その覚悟とは何か。
それは、夫婦である以上夫治兵衛と一生連れ添うこと、妻

として何があつても一生夫を守ることではないだろうか。

事実先に見たように、夫治兵衛の世間が立つか否かの瀬戸際に見事な働きをしている。それは心の奥底に、夫とは「一蓮托生」であるという強い覚悟があればこそその行動である。おさんは、大橋正叔氏が「社会的に受け身でしか生きることのできない女性が、同じ女性に頼ることによつて、ともに自らを犠牲にしなければならなかった、女性故に背負った宿命を描く、」などと論じられるような女性ではないのである。

一方小はるは、このおさんの覚悟を読み取った。読み取ったからこそ手紙を返したのである。小はるの義理は治兵衛の命だけではない。愛する治兵衛の「幸せ」である。それにはおさんの思いは不可欠であつた。おさんは、おさんとして確かに治兵衛を愛しているのである。手紙は、おさんの深い思いをきちんと伝えたのである。

ではその時、小はるの胸にはどのような思いがあつたであらうか。先の『色道大鏡』巻第十四雜女部第二妾篇付遊女之妾は、次のようにいう。

○傾城の郭を退きたるを、妾としてをく。(中略) 一たび傾城たりし者は、人にもまれ心塚かれて、其挨拶他に異なり、人の機嫌をよくしりて、慮ふかし。蓋在郭の内は、旦夕身をかざり遊宴にふけり、栄耀らしく

みゆれば、退出の後も、簡略のふるまひは、これがためにしがたくなりがたくて、晴がましき物かとおもへば聊さにあらず。しまつのすべをしりて、困窮をもいとはず、閑寂の住居をもきはらず、人に恐れ、且貞心なり。かほど有難ものなれども、わがものとなれば忍びがたく、自然とおもしろげうすくなりて、後には不便一種に扶持しをく。そも亦、友にいざなはれて、再まことの傾城をみれば、こなたは戀の似せ物のやうに覚えて、鼻につくめる。

箕山の「遊女は遊郭にあつてこそ」という論理である。遊女の優れたことをいうとともにその限界をも突いている。すでに見たように、小はるは優れた遊女であり聡明な女性である。このような遊女の現実の一面に思い至らないはずはないであらう。「遊女は遊郭にあつてこそ」とは、遊女の誇りでもある。小はるは、もとより治兵衛に身請けされようなどとは望んでおらず、おさんのように一生連れ添うなどとは、たとえ言外にもいおうなどと思つてゐなかつたであらう。小はるはおさんを受け入れることで、治兵衛への愛を貫くのである。しかしこれは小はる自身の生き方であり、このような思いもおさんに伝える必要のないものであつた。小はるは、おさんに「身にも命にもかへぬ大じの殿なれど。ひかれぬ義理合おもひ切」とのみ書いて返

したのである。それで十分であつた。

三、『心中天の網島』における義理

心中はどんな努力によつても変えられない運命であつた。愛する男をこの世に生かすことができないとわかつた時、小はるの義理は、愛する男を来世で生かすことへと変わる。すなわち治兵衛の成仏である。それには治兵衛はこの世に心を残してはならない。しかし「子共の行衛女房の。あはれも胸におしつゝ」む治兵衛は、おさんと子供に心を残しているのである。

まず小はるが、この治兵衛に對しどのようなにして義理を通してゆくか辿つてみよう。

わたしが道々思ふにもふたりがしにがほならべて。小はると紙や治兵衛と心中とさたあらば。おさん様より頼にてころしてくれるなこゝろすまい。あいさつきると取かはせしそのふみをほうくにし。大じの男をそゝのかしての心中は。さすが一ざながれのつとめの者。ぎりしらずいつはり者と世の人千人万人より。おさん様ひとりのさげし。恨ねたみもさぞと思ひやり。みらいのまよひは一ッ。わたしを愛でころしてこなさんどこぞ所をかへ。ついとわきでと打もたれくどけばともにくどき泣。ア、ぐちなこと計おさんはしうとに取

かやされ。いとまをやれば他人とたにん。りべつの女に何んのぎり。道すがらいふ通りこんどのくづんどこんどの先の世迄もめをとちぎる此ふたり。枕をならべしぬるにたれがそしるたがねたむ。サア其りべつはたれがわざわたしよりこなさん猶ぐちな。からだがあつたがわづれ立か。所々のしにをしてたとへ此からだはとびからすにつゝかれても。ふたりの玉しゐつきまつはり。地ごくへもごくらくへもつれ立て下さんせ

(下之巻)

この場合は、先学により小はるのおさんへの最後の義理立てが指摘されるところである。⁽²⁸⁾しかし小はるがおさんに対して何の義理もないことは、すでに述べた。大切なのは、治兵衛がおさんと向き合うことであつた。そのために小はるは、自分の身に代えておさんへの義理を口にしたのである。そして「りべつの女に何んのぎり。」と逃げる治兵衛に、「サア其りべつはたれがわづれですか、と優しさの中にも厳しく問い、へあなたですよ」と言外に治兵衛に教えるのである。さらに「わたしよりこなさん猶ぐちな。」と畳みかけ、治兵衛の気づきを促した。この「たれがわづれ」の「たれ」が誰なのか、つまり治兵衛なのか小はるなのかポイントだが、それについて山根為雄氏は、先の書で「サアその離別は誰のせいですか。私よりあなたの方が一

層おろかですよ。」と口語訳され、今一つ明確ではないがどちらかというと「治兵衛」と受け取れる訳文である。一方祐田善雄氏は、「みな私のためです。」と小はるの「おさんとの約束を破る結果に陥ったことへの良心の呵責である。」と明快に解釈される。ところで約束を破り、このような結果を招いたのはおさんであり、小はるではない。稿者はいま述べたように、この言葉は小はるが治兵衛のため治兵衛に対して言った言葉だと考える。そしてその小はるの言葉に、治兵衛はやつと気が付くのである。

「それよく、此からだは。ちすいくはふうしぬればくうにかへる。ごしやう七生くちせぬ。夫婦の玉しゐはなれぬ印がつてんと。わきざしずはとぬきはなしもとひぎはより我くろかみ。ふつと切て是見やこはる。此かみの有ル中は紙や治兵衛といふおさんが夫。かみ切たればしゆつけの身三がいの家を出。さいしちんぼうふずいしやのほうし。おさんといふ女房なければ。

おぬしがたつるぎりもなし（下之巻）

今まで二人の女たちの主体的な行動の間で、治兵衛の主体は見えなかった。しかしここに至つて初めて、治兵衛は小はるの義理に応え、小はるのために男として決断したのである。治兵衛は、自ら髪を切り「三がいの家を出。妻子珍宝不随者の法師。おさんといふ女房なければ。おぬしが

立つるぎりもなし。」ときつぱりという。治兵衛の義理であり、自発的、主体的行動である。

しかしこの治兵衛の行動も、祐田善雄氏によれば「形式的」であり、一方の小はるは「おさんへの真心を披瀝」したのであり、また早川久美子氏は、「不明を託びる男主人公はこれより殺さねばならない小春を思いやると同時に皆さんへの義理にひかれるのである。男は二人の女のまことに押しつぶされ一人死んでゆかねばならないとした。」と「治兵衛が自覚したからこそ苦悩を指摘される。治兵衛が自覚したのは確かである。それは、小はるが身を挺してその仕向けたのであり、治兵衛を成仏させるためであつた。その小はるの義理に応えた治兵衛が形式的であるはずがなく、おさんも同様、ましてや小はるが「女のまこと」で治兵衛を押しつぶすなどするはずもない。小はるは、いかにして自分が愛する男、治兵衛を立てるかに心を砕いているのである。

以後主導権は治兵衛に移り、治兵衛の義理が明確になつてゆく。

うき世をのがれし。あまほうし。夫婦のぎりとはぞくのむかし。とてもものにさつはりとしにばもかへて山と川。此ひの上を山になぞらへそなたがさいごば我は又。此ながれにてくびくさりさいごはおなし時なが

ら。しやしんの品も所もかへておさんに立ぬく心の道。

(下之巻)

小はるに義理を立てた治兵衛は、次におさんに「心の道」を立て抜くのである。それは「別々の捨身」によつておさんへ義理を通すことであり、治兵衛はさっぱりとおさんに別れを告げるのである。

そして最後に小はるときちんと向き合う。

そのかゝへ帯こなたへとわかむらさきの色もかも。むじやうのかぜにちりめんの此世あの世のふたへ廻り。ひのまないた木にしかとくゝりさをむすんでかりばのきじの。妻ゆへ我もくびしめくゝるわなむすび。我と我身のしにごしらへ見るにめもくれ心くれ。こなさんそれでしなしやんすか。所をへだてしぬればそばにあるも少の間。爰へくゝと手を取あひやいばでしぬるは一思ひ。さぞくつうなされうと。思へばいとしい／＼ととゞめ。かねたる忍び泣。(下之巻)

治兵衛は、「そのかゝへ帯こなたへ」と小はるからその帯を受け取つて我身の死に拵えをし、心おきなく小はるへの義理を示す。小はるには、自分の帯などとは思ひもかけないことであつたらう。「こなさんそれで死なしやんすか。」「刃で死ぬるは一思ひ。さぞ苦痛なされう」ととめどなく忍び泣くのも、男の愛の強さと愛される喜びに胸が

震えるとともに、男の苦しみを思うと大きく動揺するのである。その小はるを、治兵衛は男としてしっかり支える。

くびくゝるものどつくもしぬるにおろかの有物か。よしないうちに氣をふれさいごの念をみださず共。にしへくゝと行月をによらいとおがみめをはなさす。只西方をわすりやるな。(下之巻)

穏やかな、しかし心底据わつた力強い言葉である。小はるが治兵衛の成仏のために力を尽くしたように、治兵衛も小はるが無事に西方浄土に辿りつけるようにと支える。共にその道を歩けないからこそ「道に迷うな、西方をわすれるなよ。」と男は女を力付けるのである。ここには強くたくましい男の姿がある。それは女の愛によつて強められ、人間としてひと回りもふた回りも大きくなつた男である。それはつい最前に、小はるの死の覚悟に女房のおさんと二人して動揺し混乱していた治兵衛とは、明らかに違う。その治兵衛の小はるへの愛と義理は、このあと小はるを殺したあとで最高潮に達する。

しにもやらざるさいごのごうく共にみだれて。くるしみの。氣を取なをし引よせて。つばもと迄指通したる一刀。ゑぐるくるしき暁の見はてぬ夢ときへはてたりづほくめんさいうけうぐはにはおり打させしがいをつくろひ。泣てつきせぬなこのたもと見すてゝかゝへ

をたぐりよせ。くびにわなを引かくる寺の念仏も切ゑかう。うえんむゑんないしほうかい。平等の声をかきりにひのうへより。一れんたく生なむあみた仏とふみはつし暫くるしむ。なりひさごかげにゆるるゝことくにて。しだいにたゆるこきうの道いきせきとむるひの口に。此世の縁はきればたり。(下之巻)

治兵衛は、死の断末魔の苦しみで血にまみれ乱れた小はるの死骸を「頭北面西右脇」に横たえ、きれいに整え羽織を着せかけるのである。小はるへの最後の義理であり、氣力を振り絞って、小はるが必ず西方浄土へ辿りつけるようにと作法するのである。そこまでやり通してからやつと治兵衛は、自分に向かい、小はるの抱え帯で自らの首をくゝるのである。とかく二人の心中のその凄惨さに目を奪われる場である。しかし近松は、治兵衛の「なりひさごかげにゆるるゝことく」の姿に、すべてをやり尽くし力尽きた男の苦しみの果ての何の心残りもない静かな境地を伝えているのである。

「不心中か心中か」に対する答えは明らかである。

近松にとって義理は、どこまでも「人間的な責任」であり「心の誠」である。小はるの義理は本作『心中天の網島』全体を貫き、最後に治兵衛は義理を通すのである。遅い治兵衛の義理ではあるが、男として「心の誠」を通した

のである。

四、おわりに

近松が『心中天の網島』に描いたのは、「小はるの義理」とともに小はるによつて目覚めた「治兵衛の義理」である。劇が始まる前の「ひくにひかれぬ義理づめにふつと」心中を「いひかはし」た時の二人ではないのである。本作ではとかく「女同士の義理」が注目され、男主人公の治兵衛は運命に流されるだけの存在のように捉えられる。

本稿では、小はるという一人の女性に注目すると「女同士の義理」は成立しないことを述べ、さらに小はるに注目することによつて小はるの愛した相手、治兵衛の姿をも明瞭に浮かび上がらせてきた。治兵衛は、信多純一氏により「一生を踏外した男」といわれるが、小はるという一人の女性への愛と義理に一生を生きたのである。近松は、治兵衛を小はるやおさんという女性たちとともに、丁寧に描いていたのである。⁽³³⁾

白方勝氏は、「義理を人の心の誠として積極的に肯定していこうとする段階は、これで『心中天の網島』で」最後的に終わったとみてよい。(中略)次に来るのは、義理の非人間性を客観的に追及してゆく方法である。⁽³⁴⁾と本作の七ヶ月後、享保六年(一七二一)七月十五日上演の『女

殺油地獄』に注目された。しかし稿者は、近松にとつて、義理はどこまでも「人間的な責任」であり「心の誠」であつたと考える。近松は、決して義理の人間性を否定してはいない。どこまでも義理を人の心の誠として肯定し、人間の中に描き続けているのである。

『心中天の網島』本文の引用は、近松全集刊行会編『近松全集』第十一巻（岩波書店、一九九九年）による。本文引用にあたっては、適宜漢字をあてたほか、節章はすべて省略した。また論文中、旧字体の漢字は適宜現行の字体に改めた。傍線部及び傍点はすべて稿者による。

注

- (1) 大橋正叔氏「近松世話浄瑠璃の作劇法」〔近松門左衛門集②〕解説、新編日本古典文学全集七十五、小学館、一九九八年参照。
- (2) 『日本国語大辞典』第二版第九巻、小学館、二〇〇一年。
- (3) この言葉は、白方勝氏「心中天の網島」における女同志の義理について「その成立基盤と意義」（『新居浜工業高等専門学校紀要』第一巻、一九六五年三月）の論文中の言葉を引用させて頂いた。
- (4) 廣末保氏『古典をよむ心中天の網島』（同時代ライブラリー三〇四、岩波書店、一九九七年）
- (5) 廣末保氏『近松序説』廣末保著作集第二巻、影書房、一九九八年。
- (6) 注1同論文
- (7) 川村佳代子氏「心中天の網島」考―小春とおさんの義理について―（『熊本県立大学国文学研究』第四十一巻、一九九六年三月）
- (8) 注3同論文
- (9) 西川如見著『町人義』享保四年刊（『近世町人思想』日本思想大系五十九、岩波書店、一九七五年所収参照）
- (10) 注9同書『町人義』巻一に、「扱庶人に四つの品あり。是を四民と号せり。士農工商これなり。」とある。
- (11) 重友毅氏「心中天の網島」の解釈」（『近松の研究』重友毅著作集第三巻、文理書院、一九七二年所収）
- (12) 注3同論文
- (13) 注5同書
- (14) 山根為雄氏校注『紙屋治兵衛さいの国や小はる心中天の網島』（『近松門左衛門集②』新編日本古典文学全集七十五、小学館、一九九八年）の頭注、口語訳。
- (15) 祐田善雄氏『全講心中天の網島』至文堂、一九七五年。
- (16) 藤本箕山著『色道大鏡』延寶戊午（六年）孟冬叙（『新版色道大鏡』八木書店、二〇〇六年参照）
- (17) 先学はここに女同志の義理としておさんの高い人間性を認めている。例えば廣末保氏や祐田善雄氏は、おさんは小春に「対等の人間」として対していると評価され、祐田氏は、注15同書に「一旦は小春によつて窮地を脱したおさんが、今度は小春の窮地をすくわなければならなくなった。」と述べられる。また大橋正叔氏は、注1同論文で「女同志の義理」

と二人の女が、どれほど誠意を尽そうとしても、所詮、一人は身を縛られた遊女、一人は夫に従って家や子供をまもらなければならぬ家庭の妻である。受け身の形でしか生きることでできない女に、自らも受け身の形で迫った要求が導く結果について、相手の女の誠実を知れば、ほほ思い至るところがあったはずである。こんどはおさんが小春の立場になって、小春を救わなければならないとなれば、小春と同じように自らの身を引くことでしかない。」と論じる。

- (18) 白方勝氏は注3同論文。廣末保氏は注5同書。川村佳代子氏は注7同論文。

- (19) 祐田善雄氏は注15同書において、「女房の懷中には鬼が住むか蛇が住か」について「これは美しい曲節で語る。文章の内容とは反対に美しい節付であるのも、嫉妬に燃える女心をむき出しにせず。ふうわりと包んで悪くはない。」と述べ、この後に続くおさんの心情を、「切なる恨みを籠めて泣きどく心根は、哀れにもいじらしい。(傍点稿者)」と評される。

- (20) 近松当時の家(イエ)と世話物については、染谷智幸氏「元禄期におけるイエの確立と近松の世話浄瑠璃―元禄町人の心性と世話物の歴史性をめぐって―」(『シオン短期大学研究紀要』三十三巻、一九九三年十二月)参照。

- (21) 注9同書

- (22) 注1同論文

- (23) 例えば注3論文白方勝氏、注4・注5同書の廣末保氏、注15同書祐田善雄氏など本稿に引用させて頂いた先学は、この立場で論じられる。

- (24) 注14同書、口語訳

- (25) 注15同書

- (26) この治兵衛の言葉は「大方等大集経卷第十六」(『大正新脩大藏经』第十三巻)における「妻子珍寶及王位 臨命終時無隨者」による。『宝物集』巻第二(新日本古典文学大系四十、岩波書店、一九九三年所収)にも「第四に、死苦と申は」のところにみえ、その脚注に「妻子・珍寶および王位は死出の旅だちの時つき従ってはくれない。ただ戒と施と不放逸とが此の世と来世における伴侶となるのだ。」とある。

- (27) 注15同書

- (28) 早川久美子氏「心中天の網島」考―紙屋治兵衛の自覚と「女同志の義理」―(『同志社国文学』六十一巻、二〇〇四年十一月)

- (29) 「頭北面西右脇」は、「頭北面西右脇にして臥するは如来涅槃の相なり。」(『織田佛教大辞典』大蔵出版、一九八五年)とあり、治兵衛の小はるの成仏への祈りがある。

- (30) この場合は、例えば祐田善雄氏は注15同書にて、「それにしても、女には刀が喉笛を外れたための七転八倒の苦痛を描き、男には瓢箪が風にぶらぶらと揺れるような状態で、命の切れるまでの間の苦しみを描くなど、あまりにも凄惨な苦痛を強調したきらいがあるといえよう。(中略)近松の真意は、生命の切れるまでの凄惨な苦痛の激しい現実の描写にあつたと思われる。」と述べ、信多純一氏は、「男は水門の樋の上から、南無阿弥陀仏と踏外し、生瓢の風にゆれるように苦しみながら縊死した。(傍点原著)」と述べられる。「近松作品解釈の問題点「心中天の網島」(付載)紙・髪・神「心中天の網島」(『近松の世界』平凡社、一九九一年)。両氏とも外見上の凄惨さに注目されるが、稿者は、近松の意図はそれだけではないと考える。

(31) 森修氏「近松が描いた世界」(『近松門左衛門』 古典とその時代Ⅵ、三一書房、一九五九年) 参照。

(32) 注30と重複するが信多純一氏は、本作を「かみ」というキーワードで読み解き「男は水門の樋の上から、南無阿弥陀仏と踏外し、生飄の風にゆれるように苦しみながら縊死した。この作は一生を踏外した男の物語である。(中略)踏は文でもある。男の商いは紙屋であつた。紙の縁語に文がある。紙商いの道を踏外し、商売を疎んじ、分別を失つたその報いの死でもあつた。(傍点原著)」と述べられる。

(33) 歌舞伎俳優の三代目中村鴈治郎氏(現、坂田藤十郎氏)は、原道生氏との対談で次のように述べられる。「女のほうがよく書けてるとか、女のほうを深く近松は書いているんだ、とか、よく言われるけど、そうじゃない、そうじゃないんですよ。治兵衛の心理が書けてないと言われるけど、そうじゃない。やつてる人間が一番よくわかるんです。女の人間を深く深く書けば書くほど、相手の男の人間が今度は運命に操られていくというか、どうにもならない運命に生きていることが、何もいつてなくてもね、流れていく男のことが、よく書けてる、よくできてるんですよ。」(「対談『曾根崎心中』をめぐる―近松を演じて」(『國文学』解釈と教材の研究、第四十七巻六号、學燈社、二〇〇二年五月)

(34) 注3 同論文